

房総の 文化財

VOL. 18

平成11年2月26日

財団法人 千葉県文化財センター

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai



発掘調査速報

古代の水田跡は、田下駄の見本市

— 君津市三直中郷遺跡沖田地区 —

三直中郷遺跡は、君津市を流れる小糸川沿いにあります。沖田地区はこの遺跡のなかでも一番山すそで、現在の水田を約1メートル掘り下げたところから平安時代の水田跡が見つかり、たくさん木製農具や建築部材が発見されました。

発見された木製農具の中心は田下駄で、足板だけでも約70点ありました。この中に雪国で使われている「かんじき」に似た形のものがありません。かんじきとは、深い雪の上でも足がもぐらないように歩くための道具ですが、ここがその昔雪国だったわけではあります。ここは、特に水の集まりやすい場所で、田の中に年中水が入っている状態でした。こうした湿田で足を取られないで歩きやすくするために「か



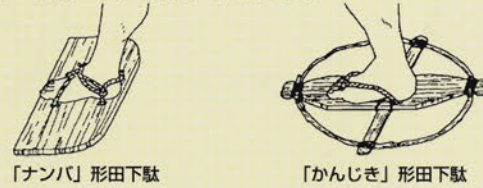
丸い棒付「かんじき」形田下駄出土状況

んじき」状の田下駄が必要になったのでしょう。丸い木棒が付いた状態で出土したものは2点だけですが、足板だけ見ても、そのデザインは実に様々です。こうした違いは、その使い方によるもので、代かきや代踏みに使われた「大足」や、湿田の作業に使われた「かんじき」形、「ナンバ」形などがあります。

これだけ多くの田下駄が一つの遺跡から見つかるのは全国的にも珍しく、かんじき形田下駄が棒付の状態出土したことも大変貴重な発見です。

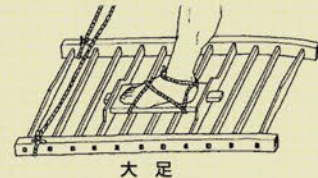
(渡辺 昭宏)

*代かき：田植えの前に、苗を植えやすいように水を張り土を柔らかくしながら平らにならす作業。
*代踏み：肥料として草を耕作土に踏み込む作業。



「ナンバ」形田下駄

「かんじき」形田下駄



大足

田下駄の使用復原
(秋山浩三氏「大足の再検討」、『考古学研究』40-3、1993.12より転載)

三直中郷遺跡出土田下駄の足板



足板をほかの部品に結びつけるための穴が両端にある。鼻緒の穴3か所。



足板を他の部品に組み付けるためのほぞが両端にある。鼻緒の穴なし。



足板を他の部品に結び付けるためのくびれが両端にある舟形。鼻緒の穴3か所



桶の蓋のようなものを転用。鼻緒の穴3か所。



「ナンバ」形田下駄。
ひもを通す穴4か所。

収蔵遺物コーナー

大きなミニチュア・瓦塔



千葉市谷津遺跡出土瓦塔（高さ約1m20cm）及び瓦堂（高さ約43cm）
(県立阿部黒土記の丘保管、撮影：堀越知雄)

6世紀に伝来した仏教は、9世紀になると東国の村落にも浸透してきました。このことは、仏教に関する字句が書かれた墨書土器や、香炉などの「仏具」が集落跡から出土することから推測されます。こうした仏教にかかわる遺物の中

に、「瓦塔」と呼ばれる粘土で焼き上げた塔のミニチュアがあります。

印西市馬込遺跡では、9世紀初めころの集落跡から、瓦塔が発見されました。この瓦塔は、破片数が多いことから以前千葉市谷津遺跡で発見されたものと同じように、瓦堂とついている可能性があります。

瓦塔をつくった目的やその使い方については、不明な部分が多いのですが、塔そのものの代用というだけでなく、仏さまを安置する厨子としての機能が考えられます。このほか、同様な性格の遺物として寺院の金堂を模した「瓦堂」があり、瓦塔とセットで出土することもあります。

また、瓦塔類が出土した集落跡で、瓦葺きの建物跡や瓦塔類をおさめていたとみられる建物跡が検出される場合があります。これらはムラの中のお寺や

お堂だったのでしょう。

瓦塔は、これまでに千葉県内では30個体以上の出土例が知られていますが、全体の形を復元できるものはごくわずかです。馬込遺跡のものは、1階部分から屋根の上につく相輪部分まで、ほとんどの部品がそろっていました。表面には彩色したあとも認められます。復元すれば子供の身長くらいはある大きなもので、当時はさぞ目立ったことでしょう。

(沖松 信隆)



印西市馬込遺跡瓦塔出土状況

遺跡今昔物語

古代の集落から緑の街へ

千葉市の中心街から南東に向かって2kmほどのところに、住宅・都市整備公団が建設を進めている『青葉の森の街』（千葉寺土地区画整理事業）があります。

事業地は、都川に沿って東西にのびる台地の西端で、眼下には東京湾を臨みます。ここには、地蔵山遺跡、中野台遺跡、鷺谷津遺跡、観音塚遺跡の4遺跡があり、昭和60年から本格的な発掘調査を行ってきました。

調査の結果、400軒にのぼる竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡、墓など数多くの遺構が見つかりました。また、観音塚遺跡からは、和同開珎や文字の刻まれた管玉、金銅製の鈴、「子駅口（家？）」と書かれた墨書土器など特殊な遺物も出土し、奈良時代から平安時代初め（8世紀～9世紀）を中心とする大規模な集落の様子が明らかになりました。

周辺には、奈良時代に創建された「千葉寺」や青葉の森公園内に保存されている荒久古墳、東海道河曲駅推定地等、古代の重要な遺跡が数多く見られ、この地が下総国南部で拠点的な役割をはたしていたと考えられます。

(島立 桂)



地蔵山遺跡と青葉の森

千葉寺

天文19年（1550）の銘がある
「銚銅六角形梅竹文透鈔
灯籠」出土（重要文化財）

荒久古墳

切石積みの横穴式石室をもつ
1辺24メートルの古墳時代終
末期（7世紀）の古墳



和同開珎と文字の刻まれた管玉



中野台遺跡

昭和30年代に弥生時代中期（約2,000年前）の壺が発見されたことで著名な遺跡。
弥生時代の竪穴住居跡や方形周溝墓、中世の墓地。

鷺谷津遺跡・観音塚遺跡

東西に連なる古代の大集落。
350軒あまりの竪穴住居跡と掘立柱建物跡

地蔵山遺跡

縄文時代早期末（約7,000年前）の土器、古代の竪穴住居跡、方形の溝に区画された墓。

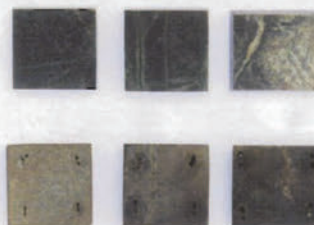
埋文アラカルト

せきせいおびかざ じゅんぽう 石製帯飾り(巡方)

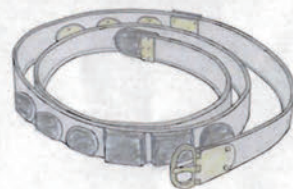
写真のタイルのような四角い石は、市原市草刈遺跡の平安時代の住居跡から発見された石製の帯飾り(巡方)です。

律令制の時代になると官人(役人)たちは、衣服の色や身につけるもので官位の差を表すようになります。当時の官人の帯は「銚帯」と呼ばれ、革製の帯に金属や石でできた方形(巡方)や半円形(丸鞠)の飾りを付けました。銚帯は、朝服と呼ばれる当時の正装や楽装束に用いられ、このうち石製の飾りが付いた帯を石帯と呼んでいます。残念ながら発掘調査では飾り部分のみが見つかることが多く、本来の姿は正倉院などに伝えられる帯から想像するしかありません。

石帯に用いられた石は、種類も様々で、大理石・水晶・



草刈遺跡出土石製帯飾り(巡方)



石帯復原図

瑪瑙・滑石などが出土しています。

これらの飾りは、細い銅線や鉄でベルト部分に固定されていました。銅線で固定するタイプは、裏側に銅線をとおすための潜り穴がけられていますこの部分はこわれやすかったようで、何度も穴をあけなおして使ったあとが窺えるものも見受けられます。市原市草刈遺跡出土の巡方は、潜り穴に銅線が残った状態で発見され、飾りの装着方法がわかる貴重な資料です。

(立和名 明美)



Q 房総では瓦葺きの建物はいつごろからあるのでしょうか。また、古代の瓦からどんなことが分かるのでしょうか。

A 6世紀に仏教が中国から朝鮮半島を経て日本に伝来すると共に、瓦も伝えられました。房総では7世紀後半から瓦が葺かれた建物がみられ、その多くはお寺の建物です。

7世紀の中ごろまで大きな古墳を造っていた房総の豪族たちは、瓦を葺いた立派な金堂や五重塔の壮麗さに驚き、房総の地でも寺院の建立をはじめました。しかし、瓦を焼いたり、重い瓦を乗せてもつぶれない建物を造るためには高度な技術が必要であり、それらの技術をもった人を都から呼んできたり、作り方の指導をうけなければ作ることができませんでした。それで、それらの技術と共に軒先を飾る瓦の文様も伝わったのです。

瓦を細かく分析することによって、作り方から作った人々の特定や供給関係を知ることができ、中央の有力者と地方の豪族の結びつきや寺院の建てられた年代などを明らかにすることができます。

たとえば、印旛郡栄町龍角寺と木更津市上総大寺廃寺は、県内では最も古い寺院であり、7世紀後半に建てられたものです。龍角寺の瓦には奈良県桜井市の山田寺跡、上総大寺廃寺の瓦には、奈良県高市郡明日香村の川原寺から出土した

のきまがわら軒丸瓦に最も近い文様がみられます。このように、軒丸瓦から房総の豪族たちと中央の豪族とのむすびつきをうかがうことができます。

(平野 雅一)



山田寺軒丸瓦



川原寺軒丸瓦



龍角寺軒丸瓦



上総大寺廃寺軒丸瓦



■表紙について
灰釉陶器浄瓶
(市原市草刈遺跡K区出土)
平安時代
仏・菩薩に浄水を供え
るための道具
撮影：堀越知道

お知らせ

当センターでは、下記タイトルのビデオライブラリー3巻を学校団体などに貸し出しております。お問い合わせ、お申し込みは、当センター資料部資料課まで。
(1)「古代と未来をつなぐ」(2)「弥生人と古墳の世界」(3)「都とむらのくらし」(各約20分)